



ウィリアムズ教授、ジャネット夫人と筆者(2018年12月20日、ベーツチャペル)。関西学院の創立125周年を記念し、建て替えられた中央講堂の銘板にウィリアムズ教授の名がある。



A. ポール・ウィリアムズ トロント大学名誉教授との出会い

水戸考道

「一期一会」とはよく言ったものである。理事長として戦前、本学の発展を大きく支えてくださった D. R. マッケンジー氏の曾孫に当たるウィリアムズ先生に私がお会いできたのは本当に奇跡的な偶然、あるいは「見えざる神の手」によるものだ。

四半紀に及ぶ海外生活を終え、帰国して間もない2010年4月、私はカナダ研究・交流担当教員として本学に赴任した。その翌年、長年会員であった日本カナダ学会から、理事として、また2012年度企画委員会・委員長として、学会の年次研究大会のプログラムの企画を命ぜられた。学会からは旅費以外支払うことができないが、その大会の基調講演にはカナダの医療政策の専門家を呼んでほしいという要望を受けた。

そのような分野の専門家を全く知らない私は困り果てて、昔お世話になった恩師 M. W. ドネリー・トロント大学名誉教授にご相談した。すると早速、トロント大学の医療政策の専門家を紹介して下さった。アポを取り、その方の研究室にお邪魔したが、あまりにも忙しすぎてお受けできないというご返事であった。が幸いにもお隣の研究室の同僚をご紹介して下さるといふ。そこでお会いしたのがウィリアムズ先生であった。

学会の財政事情などをご説明すると、2012年9月の研究大会に無報酬で来てくださることになった。感謝感激である。ウィリアムズ先生は大学院では公共政策と政治学を専攻され、比較医療、

特に高齢化社会における医療や福祉政策などの専門家として活躍されている。と同時に、剣道や空手など武道をされており、日本にとっても興味があるとおっしゃった。しかし、行ったことがないので、喜んでお引き受けしたいと、その場で快諾して下さった。お陰で、研究大会は大成功に終わった。

この時、日本での経費を抑えるため、拙宅にご宿泊いただき、さらに親交を深めることができた。そして、彼の曾祖父や大伯父が宣教師として日本で活躍されていたことを知った。ある時、「これは、お祖母さんの家に日本から送られたものが入っていた箱だよ」と、写真を見せて下さった。私は、腰を抜かすほど驚いた。その箱には「神戸市外原田の森・関西学院」と記されているではないか。

これを機に、ウィリアムズ先生とのさらなる交流が始まった。すでに客員教授として3回ほど来ていただき、本学でカナダ研究講座を担当していただいている。彼の授業は、内容的にも質的にも素晴らしく、そのお人柄も含め、大変人気がある。この秋学期にも、またお出でいただくことになっており、楽しみである。

親友としておつきあいさせていただくとともに、研究者としても一緒にカナダと日本の政治と社会に関する研究をしている。マッケンジー・ファミリーと最も関係の深い関西学院大学出版会あたりから、2人の共同研究成果を公表できれば光栄である。

【法学部教授】